現職教員が捉える「教育の歴史・思想」学習の意義に関する一考察
－アンケート調査に基づく教職課程における学習のあり方の検討－

A Preliminary Study on In-Service Teachers' Perceptions of the Significance of Learning Educational History and Philosophy: An Examination of Its Role in Teacher Education Based on a Questionnaire Survey

宇田　響*
Hibiki UDA

Abstract

This paper presents a preliminary investigation into in-service teachers' perceptions of the significance of learning educational history and philosophy during their teacher education programs. Drawing on a questionnaire survey, the study examined whether such learning is considered useful in their professional practice and explored the reasons for both positive and negative evaluations. Four key findings emerged. First, while slightly more than half of the respondents regarded the learning of educational history and philosophy as useful, a considerable proportion did not, indicating a divided evaluation. Second, teachers who perceived it as useful highlighted its contributions to the formation of educational beliefs, the application of historical knowledge to understand educational change, and its relevance to classroom practice. Third, those who perceived it as not useful pointed to a persistent gap between theory and practice and a lack of alignment with contemporary educational challenges. Fourth, the results suggested that when connections between educational history and philosophy and future teaching practice were explicitly addressed in courses, teachers were more likely to recognize its usefulness. Taken together, these findings imply that making explicit links between theoretical content and practical professional contexts is a key factor in shaping teachers' perceptions of the value of learning educational history and philosophy, and provide a basis for reconsidering how such learning should be positioned within teacher education.

1. 問題の所在

教職課程においては、「教育の基礎的理解に関する科目」の中で「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」について学習することが求められている（文部科学省 2017）。教育に関する歴史については、基礎的知識を身に付け、教育理念との関わりや教育・学校の変遷を理解すること等が目標とされ、教育に関する思想については、多様な思想と教育理念や実際の教育・学校との関連を理解すること等が目標とされている。これらの学習は、教育の現状を相対化し、教育観を形成する上で重要な役割を果たすと考えられる。

こうした教育に関する歴史・思想の学習の意義については、先行研究でも様々な形で検討されてきた。例えば、谷口（2020）は、「教育原理」において OPP シートを用いた自己評価を導入し、学生の学びを可視化した結果、教育思想史の学習が学生自身の教育観の形成に寄与することを明らかにしている。また、谷口（2022）は、コメニウスの教育思想が現代日本の学校教育と関連があることを指摘した上で、教職を志す学生にとって、教育思想や歴史を学ぶことの重要性を示している。

しかし、これらの研究の多くは将来教職を志す学生を対象としたものであり、大学等の教職課程で学習した教育に関する歴史・思想が、現職の教員にとってどのような意味をもつのか、教育実践のどのような場面で役に立っているのかを検討した研究は、これまで十分に行われてこなかった。すなわち、教育の歴史・思想の学習は制度として位置づけられ、教職観の形成に資する可能性が指摘されて

* くらしき作陽大学健康スポーツ教育学部、助教（Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Health and Sports Education, Assistant Professor）

いるにも関わらず、現職教員の認識を対象とした実証的研究は不足しているのである。こうした現職教員の認識を明らかにすることで、教職課程での学びが教育現場にどのように生かされているのかを把握でき、その成果を手がかりに「教育の歴史・思想」学習のあり方を再考することが可能となる。

そこで本稿では、現職教員を対象として実施したアンケート調査をもとに、教員として働く上で、教職課程で学習した教育の歴史・思想が役に立っているのか否か、また役に立っている（あるいは役に立っていない）と考えている理由はどのようなものなのかを明らかにしたい。そうした検討により得られた知見をふまえて、教職課程における教育の歴史・思想の学習のあり方について考察する。

2. 研究の方法

本稿で用いるデータは、オンライン調査サービス Freeasy のモニターを対象に実施したアンケート調査によって収集した。まず 2025 年 8 月上旬に小学校・中学校・高等学校の教員を抽出するためのスクリーニング調査を行い、その後、同年 9 月上旬に小学校教諭（指導教諭・講師を含む）を対象とする主調査（教育の歴史・思想についての学びと教育実践への活用に関する調査）を実施した。なお、本来であれば、全ての校種の教員を対象とし、校種間の比較や共通点を把握することが望ましい。とりわけ、教育に関する歴史・思想の学習がどの校種の教育実践にどのように生かされているのかを把握することは、教職課程全体の改善に資する重要な知見となり得る。しかしながら、本稿ではまず試行的検討として、小学校教員に限定して調査を行った。

主調査の概要と調査対象者の属性を表 1 に示した [1)]。有効回答票数は 151 名、回答票数に占める有効回答票数の割合は 93.8%であった。以降では、小学校教諭（指導教諭・講師を含む）151 名のデータをもとに分析を進める。

表 1　主調査の概要と調査対象者の属性

有効回答票数	回答票数	割合（有効回答票数／回答票数）
151名	161名	93.8%
性別		
男性（割合）	女性（割合）	
87名（57.6%）	64名（42.4%）	
年齢		
20代（割合）	30代（割合）	40代（割合）
7名（4.6%）	38名（25.2%）	36名（23.8%）
50代（割合）	60代（割合）	
30名（19.9%）	40名（26.5%）	

注：括弧内の%は、有効回答票数の内、性別／年齢についての回答があった者に占める割合。

3.「教育の歴史・思想」学習に対する現職教員の認識

本章では、現職教員が教職課程で学習した「教育の歴史・思想」をどのように捉えているのかについて検討していきたい。具体的には、現職教員が教員として働く上で、教職課程で学習した教育の歴史・思想が役に立っていると考えているのか否か、さらにはそのように考えている理由について検討することとしたい。

まずは前者について検討していきたい。図 1 は、「大学等の教職課程で「教育の歴史・思想」を学んだことは、教員として働く上で役に立っていると感じていますか？」という項目について、回答者に 4 段階（「役に立っている」から「役に立っていない」）で尋ねた結果を示したものである。

結果からは、役に立つという回答（「役に立っている」＋「少し役に立っている」）の割合が 54.3%であり、役に立っていないという回答（「役に立っていない」＋「あまり役に立っていない」）の割

合が 45.7%であることが確認できる。こうした結果から、教職課程での「教育の歴史・思想」学習について、役に立っていると感じる教員が過半数をやや上回る一方で、役に立っていないと感じる教員も少なくなく、その評価が二分されていることが明らかとなった[2)]。

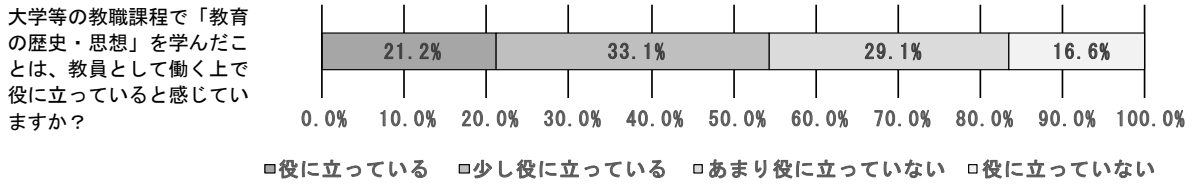

図１　「教育の歴史・思想」学習に関する認識（N=151）

アンケート調査では、先の設問に続けて「（自由記述欄）そのように感じた理由をお書きください」と記述式で理由を尋ねている。本稿では、得られた自由記述を分析対象とし、「教育の歴史・思想」学習が役に立っていると考える理由、あるいは役に立っていないと考える理由を明らかにすることを目的とする。まず、役に立っていると考える理由について整理すると、KJ 法の手順に基づく分類により「教育観の形成」「歴史的知見の活用」「教育実践への適用」の 3 点に集約された。

まずは、「教育観の形成」についてみていきたい。以下は、それに該当する自由記述である。なお、以降の自由記述は原則として原文のまま引用していること、文中の（中略）は筆者による省略を示していることを記しておきたい。

・大学で教育の歴史や思想を学ぶことは、教員としての土台を築く上で非常に重要だと思います。まず１つ目に教育の歴史や思想を学ぶことの意義としては、教育の目的や理念を理解することができることだと思います。次に教育実践の背景を知ることにもつながります。また、教育者としての倫理観や人間観の形成に役立つと思うからです。また、教員として働くときに多様な教育観への理解と柔軟性が生きてくることと思います。また教育課程や授業づくりへの対応も学べると思います。よって教育思想を学ぶことは、教員としての一貫した軸を持ち、長い教師人生を支える力になると自分は考えます。
・大学時代、なぜ教育が必要なのか、教育とは何かといった教育の基礎知識を学んだことで、教職に就くという思いが強くなった。その責任感をもつに至った。（中略）特に「教育は人なり」という言葉は印象的で、自分の言動は子どもに大きな影響を与え、子どもがどう育つかは、自分自身の人間性によって大きく左右されるのだと思い知らされた。
・教育課程の履修科目は、学びの理論であり、実際に現場に出て、理論よりも実践と思われがちだが、教育史や教育哲学は、学びの営みの根幹にあるものだと思う。（中略）本質の意味を問う、哲学的な思考を育むことが重要だと考える。

現職教員は、教育の歴史・思想に関する学習が「教育者としての倫理観や人間観の形成」や「責任感」の醸成につながるし、そうしたものが「教員としての一貫した軸を持ち、長い教師人生を支える力になる」と考えているようである。だからこそ、「教育史や教育哲学は、学びの営みの根幹にあるもの」と感じられるのだろう。こうした倫理的自覚や責任感は、教員の職務遂行の際の価値判断の基準となり得るものである。そうした意味において、教育の歴史・思想に関する学習は、教員の日常の教育実践を方向づける教育観の形成を支えていると考えられる。このように、現職教員は「教育観の形成」という点において、教育の歴史・思想に関する学習は教員として働く上で役に立つと捉えていることがうかがえる。

次に、「歴史的知見の活用」についてみていきたい。以下は、それに該当する自由記述である。

・教育の歴史について学ぶことで、先代の知恵や学びの意義についてより深く知ることができ、それを自分が子どもたちに教えるときに生かすことができると感じているから。（中略）時代の流れに合わせた指導が必要だが、その根底には今までの歴史が深く関わるので、学ぶ必要があると思う。
・教育がどのような変遷や経緯をたどって発展してきたかについて学んだことにより、教育者としての実践面の理論を確立する上でとても役に立った。また、過去の教育理論の欠点を知ることによって、今後の実践をよりしっかりとする上での大きなヒントを得ることができたことも非常に意義がある。
・教育内容の変遷を知っていることで、今までの誤った教育を反面教師に指導にあたることができる。

現職教員は、「教育の歴史について学ぶことで、先代の知恵や学びの意義についてより深く知ることができ、それを自分が子どもたちに教えるときに生かすことができる」と考えているようである。また、「教育がどのような変遷や経緯をたどって発展してきたかについて学んだこと」で「教育者としての実践面の理論を確立」したり、「今までの誤った教育を反面教師に指導にあたることができ」たりすると捉えている。このように、現職教員は「歴史的知見の活用」という点において、教育の歴史・思想に関する学習は教員として働く上で役に立つと捉えていることがうかがえる。

最後に、「教育実践への適用」についてみていきたい。以下は、それに該当する自由記述である。

・現在、教育現場で子どもたちと関わる立場にある。その際には、大学等で学んだ学校教育の歴史やその変遷がとても役立っている。特に学習指導要領の変遷は授業を進める上で、大いに参考になっている。今後、ICT 機器の活用が必須の時代になるにあたって、学びの継続を意識的に行っていきたい。
・歴史を学んだことで、生徒に物事の背景や因果関係を説明できる力とその根拠を示すことができたと感じます。単なる知識伝達ではなく、社会の出来事を広範囲に結びつけて説明が可能なので授業が深みを増すし、生徒の興味を引き出せるのに役立っているのではないかと思います。
・教育史を知ることで、色々な指導方法がわかり、日々の実践に生かすことができる。子どもをどんな存在なのかについて学ぶことで、子ども理解を深めることができる。学んだことは、同伴者として、子どもを支えていくことが重要である。子どもは存在すること自体、値打ちがあること、そのままで十分尊いことも学んだ。

現職教員は、「特に学習指導要領の変遷は授業を進める上で、大いに参考になっている」とし、教育の歴史・思想に関する学習が授業設計の手がかりとなっていると捉えていることがわかる。また、「歴史を学んだことで､生徒に物事の背景や因果関係を説明できる力とその根拠を示すことができた」や「教育史を知ることで、色々な指導方法がわかり、日々の実践に生かすことができる」といった記述からは、説明力の向上や指導法の選択に結びついていることも読み取れる。このように、現職教員は「教育実践への適用」という点において、教育の歴史・思想に関する学習は教員として働く上で役に立つと捉えていることがうかがえる。

ここまで「教育の歴史・思想」学習が役に立っていると考えている教員が、なぜそのような考えを有しているのかをみてきたが、役に立っていないと考えている教員も少なくない状況であるため、そうした教員の考え方についてもみておきたい。役に立っていないと考える理由について整理すると、KJ 法の手順に基づく分類により「理論と実践の乖離」「現代の教育課題との不適合」の 2 点に集約された。

まずは、「理論と実践の乖離」についてみていきたい。以下は、それに該当する自由記述である。

・今の学習指導要領や指導法が過去とどうつながっているのか、その背景を知る上では有効であると思う。しかし、日々の指導の中でそれが役に立っているかというとあまり役に立っているとは言え

ない。自動車の構造を知ることと、車を安全に運転することは別のことなのと同様だと思う。
・大学で色々学んでみましたが、実際の教育現場で使うということはなかなかないと思っているからです。理論と実践ではなかなか違うなというイメージがとてもあるからです。
・実践的ではないから。授業をしたり、生徒指導をしたりする上で活用できたこともなく、それについて考える時間も伝える必要も感じないから。あくまで自分の知識としてだけで持っているものだと思っています。

現職教員は、「今の学習指導要領や指導法が過去とどうつながっているのか、その背景を知る上では有効であると思う」と述べつつも、「日々の指導の中でそれが役に立っているかというとあまり役に立っているとは言えない」と考えているようである。また、「理論と実践ではなかなか違うなというイメージがとてもある」と感じ、教育の歴史・思想についての知識を「あくまで自分の知識としてだけで持っているもの」と捉えていることも読み取れる。このように、現職教員は「理論と実践の乖離」という点において、教育の歴史・思想に関する学習は教員として働く上で役に立たないと捉えていることがうかがえる。

次に、「現代の教育課題との不適合」についてみていきたい。以下は、それに該当する自由記述である。

・時代が違うので、学習したことが通用しない。
・教育の抱える課題、教材がどんどんと変わっていくのであまり参考にならない。
・日々、教育環境も変わり保護者や児童生徒の実態も変わっていく中で、歴史に学ぶことは多いが、その一方でより新しい考えが生まれてきたため、教育を進めるのが困難なケースが増えたから。

現職教員は、「時代が違うので、学習したことが通用しない」や「教育の抱える課題、教材がどんどんと変わっていくのであまり参考にならない」と考えているようである。「歴史に学ぶことは多いが、その一方でより新しい考えが生まれてきたため、教育を進めるのが困難なケースが増えた」という回答からは、教育の歴史・思想についての学習を生かすことができないという厳しい状況に置かれていることも読み取れる。このように、現職教員は「現代の教育課題との不適合」という点において、教育の歴史・思想に関する学習は教員として働く上で役に立たないと捉えていることがうかがえる。

以上のように、教育の歴史・思想に関する学習は、「教育観の形成」「歴史的知見の活用」「教育実践への適用」といった点で役に立つと捉えている教員が存在する一方で、「理論と実践の乖離」「現代の教育課題との不適合」といった点で役に立たないと捉えている教員も存在している。すなわち、この学習が教員として働く上で役に立つのか否かについては、認識が分かれているのである。

では、なぜそのような認識の違いが生じるのであろうか。その背景の一つとして考えられるのが、大学等の教職課程における授業の中で、将来の職業生活との関連がどの程度説明されていたかという点である。以下では、この点について確認する。図 2 は、「大学等の教職課程で「教育の歴史・思想」を学ぶ際に、将来の教員生活との関連について、授業の中で説明や言及はされていましたか？」という項目について、回答者に 4 段階（「関連づけて説明されていた」から「関連づけて説明されていなかった」）で尋ねた結果を示したものである[3)]。

結果からは、関連を説明されていたという回答（「関連づけて説明されていた」＋「少し関連づけて説明されていた」）の割合が 46.0%であり、関連を説明されていないという回答（「関連づけて説明されていなかった」＋「あまり関連づけて説明されていなかった」）の割合が 54.0%であることが確認できる[4)]。注目すべきは、関連を説明されていないと回答する教員が過半数をやや上回る状況にあるという点である。図は省略するが、当該項目と先に取り上げた項目（大学等の教職課程で「教育の歴史・思想」を学んだことは、教員として働く上で役に立っていると感じていますか？）との関連をみると、役に立っているという回答（「役に立っている」＋「少し役に立っている」）の割合は、

「関連づけて説明されていた」と回答した者で 83.3%、「少し関連づけて説明されていた」と回答した者で 88.2%、「あまり関連づけて説明されていなかった」と回答した者で 53.3%、「関連づけて説明されていなかった」と回答した者で 33.3%となっている。すなわち、授業内で将来の教員生活との関連が明示されている場合、「教育の歴史・思想」学習が役に立っているとする回答の割合が高まる傾向がおおよそ確認できる。以上の結果は、授業内で「教育の歴史・思想」学習と将来の教員生活との関連を強調することが、当該学習の意義についての理解を左右する要因の一つであることを示唆している。

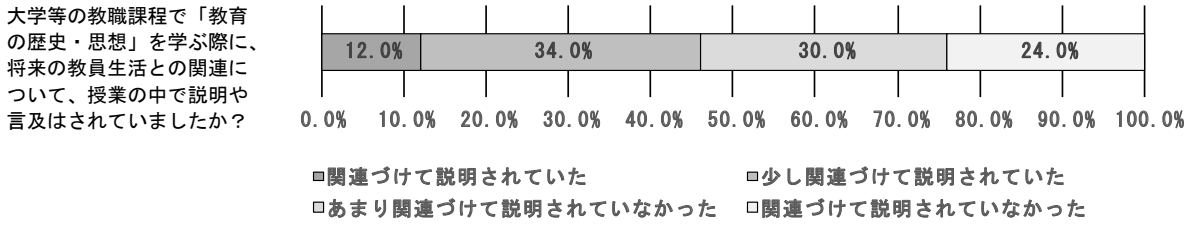

図 2　授業内における将来の教員生活との関連の説明・言及の程度（N=100）

4. まとめと考察

本稿では、現職教員を対象として実施したアンケート調査をもとに、教員として働く上で、教職課程で学習した教育の歴史・思想が役に立っているのか否か、また役に立っている（あるいは役に立っていない）と考えている理由はどのようなものなのかを試行的に検討してきた。試行的な検討によって得られた主要な知見は、以下の通りである。

第一に、教職課程での「教育の歴史・思想」学習について、役に立っていると感じる教員が過半数をやや上回る一方で、役に立っていないと感じる教員も少なくなく、その評価が二分されていることが明らかとなった。

第二に、現職教員は「教育観の形成」「歴史的知見の活用」「教育実践への適用」といった点で、教育の歴史・思想に関する学習が教員として働く上で役に立っていると捉えていることが明らかになった。

第三に、現職教員は「理論と実践の乖離」「現代の教育課題との不適合」といった点で、教育の歴史・思想に関する学習が教員として働く上で役に立っていないと捉えていることが明らかになった。

第四に、教職課程において授業内で将来の教員生活との関連が明示されている場合、「教育の歴史・思想」学習が役に立っているとする回答の割合が高まる傾向がおおよそ確認できることが明らかになった。

これらの知見は、教職課程における「教育の歴史・思想」学習のあり方を考察する上で有用なものであるといえる。特に第四の知見にもあるように、将来の教員生活との関連が明示されている場合、現職教員は教員として働く上で「教育の歴史・思想」学習が役に立っていると捉えることにつながるようである。であるならば、教職課程の「教育の歴史・思想」学習においては、授業内で当該学習と将来の教員生活との関連を丁寧に説明・言及していくことが重要だと考えられる。その際、第二の知見にもあるように、「教育観の形成」「歴史的知見の活用」「教育実践への適用」といった点を強調しながら説明･言及することも大切であろう。学生にとってはイメージしにくいことかもしれないが、教育現場で教育の歴史・思想に関する学習を生かすことができることを丁寧に説明・言及していくことは、「教育の歴史・思想」学習の意義の理解促進につながるものだと考えられる。

さらに、このように将来の教員生活との関連を明示することは、学生にとって単に授業内容についての理解を深めるだけではなく、「将来の自分の仕事に役に立つ」と実感する契機にもなり得る。すなわち、教育の歴史や思想は過去の知識を覚えるだけではなく、これから自分自身がどのように子ど

もたちと向き合い、授業を作り上げていくのかを考える上での手がかりとなるものだと考える。例えば、学習指導要領の変遷を取り上げ、それを歴史や思想の背景と関連づけて説明することで、学生は「理論と実践のつながり」をより具体的にイメージすることができるのではないだろうか。具体的にイメージするという機会を多く設けることで、学生自身の教育観の形成、ひいては将来の教育実践に対する姿勢を育むことができると考える。

最後に、本稿の課題を記しておきたい。本稿では、「教育の歴史・思想」学習が役に立っている（あるいは役に立っていない）と考える理由について、自由記述を KJ 法に基づいて整理してきたが、筆者の解釈に依存する側面が残るため、結果の妥当性に一定の課題が残っている。そのため、今後はテキストマイニング等の計量的手法を導入し、客観性を担保した分析を行い、結果の妥当性を高める作業を進めていきたい。こうした分析手法の改善を通じて、教職課程における「教育の歴史・思想」学習のあり方についての考察を一層深めていくこととする。

注

1）表 1 に示すように、回答者の年齢分布は偏っており、20 代（N=7）は 4.6%と少数である。このため、本稿で提示する知見は若年層の教員の認識を十分に反映していない可能性がある点に留意する必要がある。今後は、年齢層はもちろん、教職経験年数を考慮したサンプリングを行い、その結果をふまえて再検討する必要がある。

2）あくまで参考程度ではあるが、20～30 代、40～50 代、60 代別に、役に立つという回答（「役に立っている」＋「少し役に立っている」）の割合を示すと、20～30 代（N=45）で 48.9%、40～50 代（N=66）で 50.0%、60 代（N=40）で 67.5%となっている。すなわち、ベテラン教員ほど「教育の歴史・思想」学習が教員として働く上で役に立っていると認識する傾向が確認できる。

3）なお、大学等の教職課程で「教育の歴史・思想」を学習した際の経験を問う設問については、履修から一定の時間が経過している回答者では記憶が不正確となる可能性がある。こうした回答の信頼性に関わる問題を考慮し、本調査では「覚えていない」を選択肢に含め、無理に回答させるのではなく、必要に応じて回答を控えられるようにしている。

4）なお、授業における説明・言及の有無については、履修から一定の時間が経過した回答者では記憶が不正確となる可能性がある。この点を考慮し、比較的記憶に残っていると想定される 20～30 代（N=26）に限定して集計したところ、関連を説明されていたという回答（「関連づけて説明されていた」＋「少し関連づけて説明されていた」）の割合は 46.2%、関連を説明されていないという回答（「関連づけて説明されていなかった」＋「あまり関連づけて説明されていなかった」）の割合は 53.8%であり、全体の結果と大きな差はみられなかった。

参考文献

文部科学省（2017）『教職課程コアカリキュラム』
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf
（最終閲覧日：2025 年 9 月 3 日）

谷口雄一（2020）「教育思想史による教職課程履修学生の教育観の形成の在り方－OPP シートを活用した自己評価と教育観の形成－」『摂南大学教育学研究』第 16 号，1-10 頁.

谷口雄一（2022）「なぜ教職科目「教育原理」において教育思想史を学ぶのか－コメニウスの教育思想についての再検討－」『摂南大学教育学研究』第 18 号，25-35 頁.